

# ロマン派以前の形而上詩批判

高橋 正平

## 序

いわゆる形而上詩がイギリス文壇で脚光を浴びたのは17世紀前後からである。特に形而上詩人の代表的詩人である Donne の詩は賛否両論をもって当時の詩人達の注目を集めたが、Donne は彼以前の詩を一変させたイギリス詩壇における革命児と言っても過言ではない。彼の詩は以後イギリス詩壇で批判を浴びつつも確固たる地位を築き、現代に至っている。何が彼の詩を革命的たらしめたのか。それは形而上詩の両輪である感情と wit のうちの wit である。Donne の詩を読む者は誰もそれ以前の甘い優雅な詩の世界とは異なる論理的、論証的な詩の世界に驚く。そしてその驚きを生じせしめているのが wit である。この wit の詩が当初から批判の対象になった。Donne の時代にあつては最初に Ben Jonson (1573?-1637) が wit を批判した。Jonson には古典主義的嗜好が強く、Donne の詩の反伝統的な詩を容認できなかった。ちょうど1700年に亡くなった John Dryden はやはり Donne の詩を批判するが、それも wit 批判であった。1744年に死去した Pope (1688-1744) も同様に Donne の wit を批判している。Ben Jonson, John Dryden, Alexander Pope, イギリスの時代を代表する文人たちがすべて Donne の wit を批判した。これは彼らすべては形而上詩を高く評価しなかったということの意味している。18世紀を通してロマン派に至るまで形而上詩批判に圧倒的な影響を及ぼしたのは Samuel Johnson (1798-1784) である。本論ではロマン派による形而上詩再評価に至るまでの形而上詩への態度を Ben Jonson, John Dryden, Alexander Pope, Samuel Johnson のなかに見、その態度がいかなるものであったかを論ずることにする。概して言えばロマン派までの形而上詩批判は専ら形式的な側面、wit 批判が中心であったが、それがロマン派に至って形而上詩の内容に関心が向けられ、ロマン派詩人は形而上詩のなかに「感情」を見いだしたことについて論じていきたい。

## 1 Ben Jonson の形而上詩批判

いわゆる形而上詩人のなかでその筆頭に位置するのは John Donne である。Donne は彼以前の詩を一変させた。彼の詩は以後紆余曲折を経て今まで17世紀イギリス詩壇では代表的詩人と評価されている。何が彼を形而上詩人の中で最大の詩人とならしめたのか。形而上詩人たる Donne の詩の特徴は感情と wit である。この二つが Donne の詩を構成している。ところがロマン派詩人のダン再評価に至るまでダンへの評価はその wit を中心にして行われていた。つまり Donne の詩の技巧的な側面 wit が批判のやり玉にあがったのである。Donne の詩を読む者は誰もそれ以前のペトラルカ的、スペンサー的な詩の世界とは異なる論理的、三段論法的な詩に驚く。Donne の詩は論証的な立証の詩である。

そしてその驚きは wit によってもたらされる。wit は現代の意味とは異なり、異質なものを結びつける詩人の創作力と言っても良く、コンシート (conceit) をも含む意味で本論では使用する。直喩、暗喩により一見結びつかないものを結びつける詩人の知的作業である。この wit が当初から批判されることになった。Donne の時代では Jonson が最初に wit 批判を行った。Jonson は、Donne は理解されないために消え去るであろうと言ったが、Jonson は古典主義者であった。Jonson は、Donne の wit を批判して次のように言う。

*Metaphors farfet hinder to be understood, and affected, lose their grace*<sup>(1)</sup>.

あるいは

Whatsoever looseth the grace, and clearnesse, converts into a Riddle; the obscurity is mark'd, but not the vawle. That perish, and is past by, like the Pearle in the Fable. Our style should be like a skeine of silke, to be carried, and found by the right thread, not ravel'd, and perplex'd; then all is a knot, a heape<sup>(2)</sup>.

*Metaphors farfet* (こじつけのメタファー) は言うなれば技巧に走った wit ともいうべくもので Jonson はこれによって詩の理解、感動は妨げられるという。「こじつけのメタファー」は極端なメタファーで、これがメタフィジカル・コンシートとして Jonson 以降もダン批判の際に頻出する。2行目からの「優雅と平明さを失うものは謎に変わる。その場合は詩のわかりにくさが著しく、詩の価値はそうではない。そのような詩は消え去り、無視される。」には古典主義詩人としての Jonson の態度がうかがわれる。平易、明晰な文体を好む Jonson からは当然予想される批判である。Jonson は、彼の時代の詩人たちの一部が新奇な理解しがたい wit を詩の中で自慢げに披露したことについて次のように言う。

But now nothing is good that is natural: Right and natural language seem to have least of wit in it; that which is writh'd and tortur'd, is counted the more exquisite<sup>(3)</sup>.  
These men erre not by chance, but knowingly, and willingly....<sup>(4)</sup>

ここにも古典主義者としての Jonson の姿が見られる。「今は自然であるものは良くない。正しく自然な言葉にはすこしも wit が無いようだ。歪んだこじつけのものがより素晴らしいと考えられている。こういった人たちはたまたま誤りを犯すのではなく、故意にそして進んで過ちを犯すのである。」Jonson の詩といわゆる形而上詩人と言われる一派の詩に対する態度の違いを Jonson は指摘する。wit がもてはやされる詩壇では自然な表現は排斥され、歪んだこじつけ的な詩がもてはやされる。しかもそういった詩人は確信的に古典主義的な均整、感情の抑制の詩から逸脱しようとしている。ここで看過できないことは、Jonson は wit を fancy と同一視していることである。Jonson の wit に対する否定的な見方で、fancy よりも良識を重視する Jonson の姿勢である。これはホップズにも見られる見解であるが、Jonson は fancy の優位を認めないで、古典主義者として良識を第一にして詩を考えているのである。理性的な思考から fancy を否定し、詩における fancy の

地位を否定する。この wit を fancy としてとらえる考え方は Jonson 以後も継承されるが、Donne の詩を評価する人たち、ロマン派の Coleridge はその一人であるが、fancy を詩人の最大の特徴として wit 擁護の立場を取るのである。

Jonson は Donne と同時代の詩人で、互いに親交を深め、Drummond of Hawthornden (1585-1649) によれば Donne は自作について 2 回 Ben Jonson に対して弁明している。一つは Elizabeth Drury という少女が亡くなった際に父親を慰めるために二編の追悼詩 (First and Second Anniversaries) を Donne が書いたさいに、Jonson が「聖母マリアに捧げられたならば…」と言ったのに対し Donne は「女性のアイデア」を歌ったものだと答えたというエピソードである<sup>(5)</sup>。もう一つはジェームズ一世の息子 Prince Henry が早死した際に elegy を書いたが、Donne は「難解の点で Lord Herbert に対抗するために elegy を書いた」と Jonson に言った Donne 自身の自作へのコメント<sup>(6)</sup>、これらはいかに Donne が Jonson と親しかったかを示している。Jonson はこの他にもダンの詩については (1) Donne はアクセントを守らなかった故に絞首刑に値した<sup>(7)</sup>。(2) Donne 自身は理解されないために消え去るであろう<sup>(8)</sup>。(3) Donne は 25 才前にすべての最上の詩を書いた<sup>(9)</sup>、と Donne について言及している。Donne の詩については厳しい言葉を浴びせながらも Jonson 自身は Donne の *Elegy XI* を暗唱し、風刺詩の *The Calm* は特に Jonson の好きな詩であった<sup>(10)</sup>。これら二遍の「こじつけのメタファー」は見られない詩に対して Jonson は好意的な態度を取る反面、Donne のいわゆるメタフィジカル・コンシートを駆使した詩には反対の立場を取っていた。古典主義者 Jonson からすれば Donne のような反古典主義的な詩は受け入れられない。wit がイギリスの詩を一変させた現状に Jonson は不満を述べるが、wit がイギリスの詩の世界に新しい境地を切り開いたのは否定できない。新しい詩を作るには何か新しいものが必要である。伝統的な詩語、形式、表現に頼って新しい詩は生まれてこない。ペトルルカ風やスペンサー風の詩に甘んじているのは相変わらず甘んじたい詩だけしか生まれてこない。そのような詩になぎなたをふるったのが wit であった。この wit の是非を巡って Donne 評価は肯定、否定を繰り返す。ただしこれは以後の形而上詩評価を考えた場合大きな問題となるが、Donne を初めとする形而上詩人たちからの形而上詩に対してのマニフェスト、反論が皆無であることである。これは以後の形而上詩の隆盛に大きな影響を及ぼすことになる。逆に形而上詩への批判は Dryden, Dr. Johnson, Pope と文壇の大御所によって繰り返し書かれ、形而上詩衰退への道を切り開くことになる。Ben Jonson の形而上詩批判は Dryden, Dr. Johnson, Pope へと継続され、ロマン派の登場まで徹底的に批判される。wit 再評価はエリオットが登場する 20 世紀前半を待たねばならないが、17 世紀においても wit を賞賛した詩人がいたことを忘れてならない。

## 2 Thomas Carew の wit 称賛

16 世紀から 17 世紀前半までイギリス文壇の代表的人物 Ben Jonson の Donne の wit 批判は時代を象徴する批判であったが、それでも Donne の wit を肯定的に評価した詩人がいた。それは Thomas Carew (1598?-1639?) である。彼は 1633 年、Donne の死 2 年後に以下のエレジーを書き、Donne を絶賛した。

The Muses garden with Pedantique weedes  
 O'rspread, was purg'd by thee; The lazie seeds  
 Of servile imitation thrown away;  
 And fresh invention planted, Thou didst pay  
 The debts of our penurious bankrupt age<sup>(11)</sup>;

「衛学的な雑草がはびこった詩神の庭」は古代ギリシア、ローマの神話や詩人たちの引用でちりばめられた詩である。そのような詩を Donne は書かなかった。書いたとしても古典の世界を揶揄する態度を見せる。「屈從的な模倣」は Jonson 等の古典主義的な創作手法で、古典主義を標榜する詩人はギリシア、ローマの古典の世界を規範とし、理性・調和・形式美を追究する芸術を模倣することを自らの義務とした。「衛学的な雑草がはびこった詩神の庭」と「模倣」は Donne 以前の詩の世界である。しかし Donne はその世界に背を向けた。ギリシア、ローマの古典世界は一掃され、模倣に終止する詩は捨てられた。代わりに Donne は新しい「考案」を詩に植え付けた。この「考案」が wit であることは明白である。Donne 以前のペトラルカ、スペンサー流の甘美な詩、古代ギリシア、ローマの詩の亜流に代わり、Donne は詩の世界を一変させた。Carew にとって現代は「貧乏な破産した時代の負債を抱え」ている。これは同じようなテーマ、類似した手法による詩が書かれ続けていたイギリスの現状である。Donne は新しい詩を書くことによってその負債を完済したのである。Carew は Donne の新しい詩について次のように書く。

...[Thou hast] open'd Us a Mine  
 Of rich and pregnant phansie, drawne a line  
 Of masculine expression....<sup>(12)</sup>

空想力、力強い表現は Donne の詩の特徴であるが、それは彼以前のスペンサー流の詩への反旗でもあった。空想力は wit、力強い表現は「強靱な詩」として Donne 等形而上詩人の根幹を成す。Donne 以前に Donne のような詩は存在しなかった。Donne は、古典古代の伝統的な詩の模倣に終始し、新しい詩を作らない当代の詩壇とは真っ向から対立し、Jonson からは好意的には受け入れられなかったが、Carew からは絶賛される。Carew は Donne の詩についてさらに言葉を続ける。

Thou shalt yield no precedence, but of time,  
 And the blinde fate of language, whose tun'd chime  
 More charmes the outward sense; Yet thou maist claime  
 From so great disadvantage greater fame,  
 Since to the awe of thy imperious wit  
 Our stubborne language bends, made only fit  
 With her tough-thick-rib'd hoops to gird about  
 Thy Giant phancie, which had prov'd too stout  
 For their soft melting Phrases....<sup>(13)</sup>

“the blinde fate of language”, “tun’d chime”は Donne 以前の詩人と詩を意味していよう。Donne 以前の詩人たちの形骸化した言葉の使用、流れるような旋律、これらは古典主義者たちの詩の特徴である。しかし堂々たる wit の畏れに英語は屈服すると Carew は言う。斬新な手法を使用し、読者を啞然とさせる詩がイギリスの詩壇を変えたことを Carew は述べる。Carew に至って Donne の wit は肯定される。“her tough-thick-rib’d hoops”（ことばの強靱な太い肋材で補強されたたが）とは Donne の論証的立証的な詩を意味しており、“Thy Giant phancie”（巨大な空想力）は wit に言及している。Donne の「巨大な空想力」は彼以前の甘美な詩には大胆しすぎた。Donne の獨創性、wit の使用、大胆すぎる空想力、これらを詩の中に縦横無尽に駆使する形而上詩人としての Donne を Carew は賞賛する。Carew と Jonson の Donne への態度は全く異なる。Jonson は古典主義者として wit 使用を駆使する Donne には否定的だった。古典主義者 Jonson からすれば Donne の詩は詩の伝統を破壊する。Jonson にとってはいかにして形式的な均整美を詩に表すかが詩人にとって最大の義務であり、伝統破壊は詩、詩人の存在理由を抹消する。Carew が Donne へのエレジーを書いたのは1633年で Jonson はまだ生存していたが、一方は Donne 肯定、他方は Donne 否定への態度を示す。

17世紀に wit を賞賛した詩人がもう一人いる。Cowley (1618-1667)である。彼は“Ode: Of Wit”で以下のように wit について書いた。

In a true piece of *Wit* all things must be,  
 Yet all things there *agree*.  
 As in the *Ark*, joyn’d without force or strife,  
 All *Creatures* dwell; all *Creatures* that had *Life*.  
 Or as the *Primitive Forms* of all  
 (If we compare great things with small)  
 Which without *Discord* or *Confusion* lie,  
 In that strange *Mirror of the Deitie* <sup>(14)</sup>.

ここには wit の特徴が簡潔に書かれている。ここで言う wit は以後の行を読むと Donne 的な wit を差していると考えてもよいだろう。真の wit にはすべてのものがあり、しかもそれらは調和していると言う。ちょうどノア方舟の中の動物のように不調和も混乱もない。wit は神がつくり出す鏡のようなものである。これは「真の wit」であるが、「真の wit」があれば「偽りの wit」があることは確かで、それはこじつけや無理な結びつきがもたらすものである。Donne の wit には賛否両論があるが、Donne の wit は詩にうまくフィットしており、Johnson 流に暴力によって無理矢理結びつけられてはいない。強引に不和もなく結びつけられているのが「真の wit」である。wit は我々に違和感を抱かせながらも二つの極端なものを対比させ、そして結びつける詩人の離れ技である。Cowley は Donne の詩に影響を受けた詩人であるので、ここで Cowley は Donne 的な wit について論じていると理解できるだろう。いずれにせよ Carew も Cowley も当時攻撃されればなしであった wit の評価を逆転しその価値を積極的に容認していることは形而上詩への評価と相まって看過できない重要な指摘である。Donne の詩や wit への評価が賛否両論

に分かれていたことが Carew、Cowley と Jonson から知ることができる。

17世紀の文壇のもう一人の大御所に Dryden [1631-1700] がいる。Dryden はちょうど1700年に亡くなるが、彼の Donne 評価は17世紀の Donne 評価に決定的な影響を及ぼす。もちろん Dryden だけではない。Bacon (1561-1626), Hobbes (1558-1679), Royal Society (1662年認可) の存在も17世紀にける形而上詩失墜の大きな要因であった。次に Dryden の形而上詩批判を見てみよう。

### 3 Dryden の形而上詩批判

Jonson 同様古典主義者であった Dryden の Donne への態度は批判一辺倒であると思いがちだが、Dryden の Donne への評価は肯定と否定を繰り返す。Dryden は生涯を通して Donne の「創意に富む才能」と「wit の豊かさ」に感嘆し、その理由は Dryden が決して形而上詩のイメージへの好みを失わなかったからだとして Sharp が言っているように<sup>(15)</sup>、Dryden は Donne を初めとする形而上詩人には興味を抱き続けていた。Dryden の Donne への評価は最終的には否定へと向かうが、これは時代が徐々に明瞭な文章を求めていったことと密接な関係がある。Dryden の Donne 肯定は wit であり、否定は韻律へ向けられる。Dryden は John Cleaveland (1613-1658) と Donne の風刺詩を比較している。

...there is this difference twixt his Satires and Doctor Donne's; that the one gives us deep thoughts in common language, though rough cadence; the other gives us common thoughts in abstruse words<sup>(16)</sup>.

Cleaveland は形而上詩人に属する詩人であるが、彼の詩は形而上詩の最も悪い点、つまり晦渋さと極端な wit、コンシートで悪評を買った詩人である。Donne の風刺詩は最も初期の詩であるが、社会に対する風刺、批判が際立つ詩である。会話調の言葉でストーリーが展開する。Cleaveland の風刺詩が「難解なことばで平凡な思想」を表しているのに反し、Donne の風刺詩は「普通のことばで深い思想」を読者に与えるという Dryden の評価は当を得ている。なぜ Dryden で Donne の風刺詩を評価したかと言えば風刺詩には『唄とソネット』に見られるような wit、コンシートがほとんど見られないからである。Donne の初期の詩への Dryden の評価は高い。Dryden の韻律批判は Ben Jonson の「Donne はアクセントを守らなかった故に絞首刑に値する」という言葉を思い起こさせるが、古典主義者 Dryden からすれば流れるような韻律を無視した Donne は当然批判の対象となる。“rough cadence” とは Donne が韻律を無視したことへの言及である。1692年 Dryden は Donne を “the greatest wit, but not the best poet of our nation.” と言ったが、一年後 Donne と Charles, Earl of Dorset の詩を比較して形而上詩の歴史上特に有名な批判を書く。

Donne alone...had your [Dorset's] talent; but was not happy enough to arrive at your versification; and were he translated into numbers, and English, he would yet be wanting in the dignity of expression... He [Donne] affects the metaphysics, not only in

his satires, but in his amorous verses, when nature only should reign; and perplexes the minds of the fair sex with nice speculations of philosophy, when he should engage their hearts, and entertain them with the softnesses of love<sup>(17)</sup>.

「Donneは自然（な表現）が支配すべきときに風刺詩のみならず恋愛詩においてもメタフィジックスを気取る。そして彼が女性の心を引きつけ、愛の優しさで彼女たちを楽しませるべきときに哲学の微妙な思索で女性達の心を当惑させる。」これは形而上詩批判でも後述する Dr. Johnson の *discordia concors* と共に形而上詩批判を決定づけた一節でもある。Dryden の理想は「自然な表現」であるが、Donne は意図的に難解な表現を使って女性を惑わす Donne の表現には無理があることを Dryden は指摘する。「メタフィジックスを気取る」と Dryden は言うが、この「メタフィジックス」には wit やコンシートも含まれるだろう。「メタフィジックス」と対照的に「愛の優しさ」は「自然な表現」である。これが書かれたのは17世紀もそろそろ終わりに近づく1693年（Dryden62才）であった。上記の Dryden の言葉は Donne の詩（特に『唄とソネット』）については一般的な批判であろうが、Donne の詩の強靱な思想と情熱を無視した批判であり、また Donne の詩に使われる wit やコンシートの機能をも考慮しない批判でもある。コンシートを使うことによって思想と感情をうまく融合する Donne の詩の本質には触れていない。ただ術学ぶった態度で女性を当惑させていると Dryden は言うだけである。しかし Donne の詩のおもしろさは、実は、女性を当惑させることではなく、彼の分析的論証によって女性を安心させることにある。不安な気持ちで愛し合う男女に確かな愛を証明することにより愛の不安を払拭するのがダンの恋愛詩である。確かに女性は難解なことを言われて戸惑うかもしれないが、それは詩を書く詩人と愛する女性に愛し合うことの実証、愛することの絶対的確信、二人には決して別れはないことを実証するためなのである。このような Donne のレトリックを理解することなしには Donne の詩の面白さは理解できない。時代を代表する Dryden が Donne の詩を理解しなかったはずはないが、Donne の詩の本質を考えると Dryden の Donne 批判はただ一般受けを狙った批判としか映らない。ただ Dryden は若いときには Donne 的な wit を好意的に受け止めていた。Dryden は次のように言っている。

The composition of all poems is, or ought to be, of wit; and wit in the poet, or Wit-writing (if you will give me leave to use a school distinction) is no other than the faculty of imagination in the writer, which, like a nimble spaniel, beats over and ranges through the field of memory, till it springs the quarry it hunted after; or, without metaphor, which searches over all the memory for the species or ideas of those things which it designs to represent. Wit-written is that which is well defined, the happy result of thought or product of imagination<sup>(18)</sup>.

ここで Dryden は、すべての詩は wit によって書かれると言い、詩人の wit は想像力に他ならないとさえ言い切っている。Dryden にとって wit は想像力であり、詩人にはなくてはならないものである。素早いスパニエル犬のように記憶の野原を探し、歩き回り、ついには求めていた獲物を狩り出す。Dryden は wit を Donne のような wit、コンシート

のように使用しているのかどうかははっきりしないが、頭脳の知的な回転力の早さを意味しているので、Donne 的なコンシートをも wit のなかに含ませていると考えることができる。「書かれたwit」はうまく明確にされるものであり、思想の適切な結果であり、または想像力の産物である、と Dryden は言う。ここでも wit と想像力の関係を述べている。Dryden にとって wit は想像力と密接な関係にある。試作の根源は wit であり、想像力である。これは Dryden が少しも wit を否定していないことを示している。むしろ積極的にwitの機能、価値を容認しているのである。Dryden はさらに wit について次のように言う。

...it [wit] is some lively and apt description, dressed in such colours of speech that it sets before your eyes the absent objects as perfectly and more delightfully than nature<sup>(19)</sup>.

ここで Dryden は wit の果たす機能について書いている。wit は自然な描写と同じくらいかもしくはそれ以上に完璧に面白く存在しないものを我々の目の前に置いてくれる生き生きとした適切な表現である。wit によってありもしないものが生き生きと眼前に浮かんでくる、そのような働きをするのが wit であるというわけである。ここには wit に対する否定的な態度は全く見られない。むしろ詩を完璧なものにする働きをする詩人の知的作用としての wit の存在を積極的に認めているのである。しかし、Bacon, Hobbes, Locke, Royal Society により形而上詩的な wit、コンシート使用による詩は誰にでも理解できる明晰な文章に取って代わられていく中でやはり次第にその地位を失っていかざるをえない。Dryden の文章にも「微妙さ」や「示唆」がなくなり、「学識豊かな比喩表現」も使われなくなり、「精巧に作り出される複雑性」もなくなっていく<sup>(20)</sup>。そして Dryden は文字通りの意味を尊重し、一般的な、普遍的なイメージャリーが益々使用されていく。Sharp は、詩は形而上スタイルを放棄することによって何を失ったのかと問い、次のように言う。

It [poetry] had lost its subtlety, its indirection, its hidden layers of reference; it had lost its consciousness of the other world, with its finespun intangibilities; it had lost its sensibility, the amazing range of its feelings and moods, from the heavy and gross to the almost imperceptibly light and transient; it had also lost its subjectivity, its psychological intricacies, its puzzling individual patterns of logic. And in losing these qualities it had shed its obscurity, harshness, and extravagance<sup>(21)</sup>.

最終行の「晦渋さ、耳ざわりの悪さ、突飛もない考え」はまさしく形而上詩批判の核心である。この反対こそが18世紀が目指した詩のすがたであり、「わかりやすさ」「聞きごちの良さ」「常識的な考え」が Dryden の詩の理想となり、Dryden は徐々にそのような詩を書いていく。逆に詩が形而上詩のスタイルを破棄することによって何を得たのか。それは“regularity and well-marked boundaries”である。形而上詩人の“irregularity”に対する「規則性」、これこそが新古典主義者が求めたもので、それは彼らの規則正しい heroic couplet の詩に顕著である。また新古典主義の詩は“formal garden”のようであり、

それは“proportion, order, and discipline”を特徴とし、誰にでも理解できる客観的眞実を理想とする<sup>(22)</sup>。Sharp が新古典主義について述べていることは Dryden について言える。このように Dryden は形而上詩的な wit に関心を寄せながらも次第にそこから離れ、古典主義的な詩へと移行していく。Dryden は当初難解な表現を自慢げに披露する形而上詩を批判したが、詩のなかで使用される wit については容認の姿勢を示していた。しかし、17世紀も終わりにかけて徐々に形而上詩的な wit の世界は敬遠され、明晰な文体へと文学は推移していく。Dryden もやはり時代の子であったと言わねばならない。

Dryden の死後半世紀近くも18世紀の文壇で活躍した Pope も形而上詩に関心を寄せているが、Dr. Johnson の形而上詩批判を見る前に Pope の形而上詩特に Donne への態度を見てみる。

#### 4 Alexander Pope の形而上詩批判

Pope は1688年生まれで1744年に没するが、18世紀中頃までイギリス文壇の中心的人物であった。批評の分野での18世紀の中心的人物が Johnson であった。両者が18世紀のイギリス文壇を牽引したと言っても過言ではない。Pope は Donne の詩を知っており、特に風刺詩は彼のお気に入りであった。ダンの風刺詩2編（IIとIV）からの借用を *Windsor Forest* や *An Essay on Criticism* に取り入れているが、この風刺詩を後にポーブは18世紀流に書き直している。それは18世紀のイギリスの詩への態度を明らかにしている。風刺詩4番の改作の以下のようにになっている<sup>(23)</sup>。

(Donne)

As prone to'all ill, and of good as forget-  
ful, as proud, as lustfull, and as much in debt,  
As vaine, as witlesse, and as false as they  
Which dwell at Court, for once going that way.;

(ll. 13 -16)

風刺詩4番は宮廷の腐敗を描いた詩で、詩人は宮廷で地獄絵を見たと言う。引用行では詩人が宮廷に行ったが故に詩人は宮廷人と同じようにすべての悪事を犯すがちになり、良いことは忘れ、傲慢で、好色で、多くの借金を背負い、見栄坊で、愚かで、嘘つきと思われようになったと言う。それくらい宮廷にはあらゆる悪が蔓延している場所である。この行が Pope になると次のように改作される。

(Pope)

So was I punish'd, as if full as *proud*,  
As prone to *Ill*, as negligent of *Good*,  
As deep in *Debt*, without a thought to pay,  
As *vain*, as *idle*, and as *false*, as they  
who *live* at *Court*, for going once that Way.

詩の内容は Donne の詩と大体同じ、使用されている語や比喩も Donne のものと同じであるが、概して Pope の改作は読みやすく、2行の heroic couplet と3行でうまくまとめられている。Donne の風刺詩は行末に終止がなく次行にまたがっている行があるが、Pope の改作は全体としてうまくまとまっている。Pope の改作はまとまりがある反面、Donneの風刺詩のダイナミックな躍動感は消えている。ただ Pope が変えたのは韻律である。Donne の不規則なリズムは規則的なリズム、耳に心地よい脚韻に取って代わられている。Donne と Pope を比較して Joseph Warton (1722-1800) は次のように言っている。

Two noblemen of taste and learning, the Duke of Shrewsbury and the Earl of Oxford, desired Pope to melt down and cast anew the weighty bullion of Dr. Donne's satires; who had degraded and deformed a vast fund of sterling wit, and strong sense, by the most harsh and uncouth diction. Pope succeeded in giving harmony to a writer, more rough and rugged than any of his age...<sup>(24)</sup>

Donne の詩語の“harsh”, “uncouth”, “rough”, “rugged” は Donne の詩語に関して以後頻出する批判語である。それに対する Pope の“harmony”である。「耳ざわりな」「ごちない」「洗練されていない」に対する「調和」、両詩人の特徴を的確に表す形容詩である。Popeのおかげで Donne の風刺詩は知られることになったが、Pope は Donne の詩を改作しなければならなかった。このことは Donne の風刺詩がいかに時代に歓迎されていなかったかを明らかにしている。Pope も風刺詩を愛好し、Donne の風刺の対象である宮廷人、弁護士、軍人への風刺には共鳴するところがあったと思われるが、韻律の観点からは Donne の風刺詩は認めることはできなかった。だから Pope は Donne の風刺詩を時代の嗜好に合うように書き直したのである。Donne の事実即した風刺精神、口語的な表現—これらが Pope の時代の読者に訴えた Donne の風刺詩の特徴でもあったが、問題は韻律であった。

Pope は風刺詩の他に Donne の『魂の遍歴』もお気に入りの詩であった。この詩も風刺詩で、魂の輪廻を描いた未完の詩である。Pope にとって Donne の最上の詩は風刺詩と『魂の遍歴』であった。Pope は Donneについて “Donne had no imagination, but as much wit as any writer can possibly have.”<sup>(25)</sup>と言っている。Donne には想像力はないというが、これは Donne の風刺詩について言っている言葉であろうか。Donne の風刺詩はありのままの社会の一面が描かれている。だから想像の世界は風刺詩にはない。Pope が Donne の wit を賞賛するが、これは主として『唄とソネット』の詩について言っている言葉であろう。Pope は風刺詩や『魂の遍歴』の他にも Donne の他の詩についても熟知していた。この wit は Dr. Johnson の *discordia concors* で、ジョンソンが批判した形而上詩の特徴でもある。一見似ていないものの中に類似点を見つけ出す作業、これは頭の回転力を示すもので、Pope にとっては魅力的であったが、Pope は wit を受け入れることはできなかった。むしろそれを批判している。

I have not attempted anything of a pastoral comedy, because I think the taste of our age will not relish a poem of that sort. People seek for what they call wit, on all

subjects, and in all places; not considering nature loves truth so well, that it hardly ever admits of flourishing. Conceit is to nature what paint is to beauty; it is not only needless, but impairs what it would improve. There is certain majesty in simplicity, which is far above all the quaintness of wit<sup>(26)</sup>.

Pope にとって wit は「奇異」を読者にもたらすものである。自然な表現は真理を愛するのによたらと wit を使う詩人に Pope は不満を表す。自然な表現はコンシートによっていたずらにゆがめられている。wit の人工性、わざとらしさが批判される。逆に「平易さ」には「威厳」があり、その平易さは wit がもたらすあらゆる奇異をはるかに凌駕しているという Pope の言葉はまさしく18世紀の英詩の核心をつく表現である。時代は Donne の wit を容認することはなかった。いかに平明に明晰に表現するかが最も重要視された時代で、いくら Donne の wit を賞賛してもそれは一般には受け入れないものであった。Pope にとって Donne の詩は人工的な物であった。

Pope は1744年に死去するが、彼の死後 Pope に代わって英国文壇に君臨するのは Johnson である。次に Johnson の形而上詩批判に論を移したい。

## 5 Johnson の形而上詩批判

形而上詩を考える際に Johnson は特記すべき批評家である。“metaphysical poets”は Johnson が Cowley 伝で初めて使用した言葉である。そこでの彼の形而上詩批判がロマン派以前にイギリスの文壇に圧倒的なインパクトを与え、形而上詩失墜の大きな要因をもたらした。Johnson は Donne の詩をよく読んでいた。彼の英語辞書には Donne の詩から384回の引用がある。一番多いのは89回の『唄とソネット』からで、次に多いのが書簡詩からの88回で、他にも二編の *Anniversary poems*, エレジー、風刺詩等 Donne の詩のほとんどからの引用である<sup>(27)</sup>。Johnson が嫌ったのは宗教詩であるが、宗教詩には Donne の神への大げさな感情が見られ、Johnson の Donne の宗教詩への反感は18世紀の熱狂への反感の結果でもあろう。Donne が詩の中で使用する wit, コンシートも Johnson のお気に入りではなかった。形而上詩歴史のなかで Johnson がその不朽の名を残すのは『英国詩人伝』のなかの『Cowley伝』である。ここで Johnson は形而上詩を容赦なく批判した。①こじつけで不自然なコンシート②スコラ哲学、錬金術、新天文学等の詩の中での利用③一般化よりは特定化への関心が強いこと、この3点が形而上詩の批判として挙げられる。これらを中心にして Cowley 伝における Johnson の形而上詩批判を見てみたい。

Johnson は17世紀初めに“the metaphysical poets”と呼ばれる書き手の集団が現れたと初めて“metaphysical poets”なる表現を使った。形而上詩人は学識ある人たちで、学識を見せることが彼らのすべての努力であつたと言ふ<sup>(28)</sup>。確かに形而上詩人は学識を詩の中で利用し、それが反感を買った。しかし、Donne について言えば、ただ Donne はスコラ哲学、錬金術、新天文学等を学識を示すだけだったかというところとは言えず、Donne は自己の主張を立証するために学識を詩に用いているだけであり、これは Donne には当てはまらない。次に問題になるのはコンシートである。理性、秩序、穏健さを求める Johnson からすればコンシートは容認できない。コンシートに関しては Johnson の最も有名な wit

の定義がある。

...wit, abstracted from its effects upon the hearer, may be more rigorously and philosophically as a kind of *discordia concors*; a combination of dissimilar images, or discovery of occult resemblances in things apparently unlike. Or wit, thus defined, they [the metaphysical poets] have more than enough. The most heterogeneous ideas are yoked by violence together; nature and art are ransacked for illustrations, and allusions...<sup>(29)</sup>

*discordia concors* (不調和の調和)としての wit 観はとりわけ Johnson の名を文学史上その確固たる名をとどめさせることになるが、不調和の調和としての wit 観は彼が初めてではない。Donne の wit を賞賛する人たちは Johnson とは異なりこの不調和の調和こそが Donne の詩をしたらしめていると激賞したのである。すでに見た Carew はその代表的な詩人である。wit の肯定、否定が Donne の肯定、否定へと至るのであるが、Johnson は wit を否定的にとらえ、その結果として形而上詩をも否定的に見るの。「不調和の調和」としての形而上詩観はこれ以後形而上詩批判には必ず登場する表現であるが、実は「不調和の調和」は見方を変えれば形而上詩のメリットでもある。この wit こそが Donne の詩に感情と思想の統一をもたらしているもので、おそらくは Coleridge も Donne の wit には肯定的であったが、それも Donne の詩の中の感情が wit の使用により中和されていたからであった。Eliot が Donne の詩を賞賛した理由の一つはこの wit で、彼は自らそれを自分の特に初期の詩「プルーフロック」で実践した。Johnson の Donne 評価はある意味では受け入れられない評価で、Donne の詩の最大の特徴を Johnson は否定していることになる。見方を変えれば形而上詩復活のきざしは Johnson にあったとも言えよう。しかし18世紀イギリスでは wit は容認できる状況ではなかった。時代は新古典主義の時代である。wit は時代の嗜好には合わなかったということである。Johnson は Donne のコンパス・イメージについて次のように言う。

To the following comparison of a man that travels, and his wife that stays at home, with a pair of compasses, it may be doubted whether absurdity or ingenuity has the better claim<sup>(30)</sup>.

コンパス・イメージは「ばかげたこと」か「創意工夫」かである。Johnson にとっては「ばかげたこと」となる。しかし、これが詩人の「創意工夫」を表すものとして好意的に見られていたことは Donne の時代でもあった。伝統を無視した大胆なコンシートの使用に伝統主義者は反対したが、それは Ben Jonson, Dryden, Pope を見れば明らかである。Johnson も伝統主義者、新古典主義者として当然のことながらコンシートには否定的な態度を取る。コンシートは「自然」を無視し、単なる「巧みな考案品」としか見られないのである。Johnson にとって最も重要なのは「自然」と「常識」であるが、コンシートはまさにこの二つには反するものである。wit について Johnson は次のように言う。

If the father of criticism has rightly denominated poetry...an imitative art, these writers [the metaphysical poets] will without great wrong lose their right to the names of poets, for they cannot be said to have imitated anything: they neither copied nature nor life; neither painted the forms of matter nor represented the operation of the intellect<sup>(31)</sup>.

形而上詩人は「自然も人生を模倣することはしなかった」という言葉は Johnson の芸術観に裏付けされたものである。コンシートは言うなれば突飛な、自分勝手な気ままな表現方法で、Johnson には受け入れがたいものである。この wit 観はまさに *discordia concors* で意見相反するものの中に類似点を見いだす詩人の離れ業である。Johnson は次のように言う。

Those, however, who deny them [the metaphysical poets] to be poets allow them to be wits...If wit be well described by Pope as being “that which has often been thought, but was never before so well expressed,” they certainly never attained nor ever sought it...But Pope’s account of wit is undoubtedly erroneous: he depresses it below its natural dignity, and reduce it from strength of thought to happiness of language...If by a more noble and more adequate conception that be considered as wit which is at once natural and new, that which, though not obvious, is, upon its first production, acknowledged to be just; if it be that which he that never found it wonders how he missed, to wit of this kind the metaphysical poets have seldom risen<sup>(32)</sup>.

自然の中に正しいな類似を見つけないで、自然界のみならず思想の領域においてもショッキングな奇妙な類似を見いだす、これがメタフィジカル・コンシートである。形而上詩の特徴の一つに読者に驚きを与えることと言われるが、Johnson のコンシート定義はまさしく読者に奇異によって驚きを読者に与える形而上詩人の詩観を表している。Johnson からすれば奇異な印象を与え、ショックを与えるコンシートは否定される。詩人の頭の回転の良さを誇示するだけで真の意味での詩となっていない。ところが Johnson は全面的に wit を否定しているのかというとすべてがそうとは言い切れないのである。Johnson の次の言葉を見てみたい。

If they [the metaphysical poets] frequently threw away their wit upon false conceits, they likewise sometimes struck out unexpected truth; if their conceits were far-fetched, they were often worth the carriage...Though the following lines of Donne [ll. 1-10 of the verse letter, “To the Countess of Bedford”] have something in them too scholastic, they are not inelegant...The tears of lovers are always of great poetical account; but Donne has extended them into worlds, (Johnson’s quotation of ll. 10-19 of ‘A Valediction of Weeping’)<sup>(33)</sup>.

形而上詩は「予期せぬ真実」を作り出すとか「コンシートがこじつけであってもコンシートはしばしばその意味の価値がある」という言葉にはコンシートを全面的に否定する姿勢は見られない。Johnson はむしろコンシートの価値を認めている。ベッドフォード伯爵夫

人への書簡詩の行についてはスコラ哲学的ではあるが趣がないわけではない、「愛し合う男女の涙を世界へ広げている」には Donne のコンシートを全面的に否定する姿勢は見られない。metaphor と simile を論じる Johnson には同様な姿勢が見られる。

A poetical simile is the discovery of likeness between two actions, in their general nature dissimilar...the mind is impressed with the resemblance of things generally unlike, as unlike as intellect and body...A simile may be compared to lines converging at a point, and is more excellent as the lines approach from greater distance<sup>(34)</sup>.

前半の simile は *discordia concors* の言い換えで、後半の「シミリは一点に集まる線にたとえられる。そしてその線がより遠い所から近づくときにはよりすばらしい」も *discordia concors* の説明と言ってもいいが、simile は一種のコンシートであり、Johnson はここでも simile を賞賛していることに我々は注目しなければならない。Johnson は、似ていないものを結びつけることが巧みであればあるほど simile はすばらしいと考えている。似ていないものを結びつけるという行為はそこに詩人の技巧性があるわけで Johnson の芸術観からすれば本来そのような詩人の技巧性は排除の対象となるのであるが、Johnson は自らの信念、当時の詩風とは相反するような態度を示している。これは裏を返せば Johnson がいかに形而上詩を評価していたかの表れである。そもそも Johnson は『Donne 伝』は書かなくて『Cowley 伝』を書いた。Johnson の形而上詩批判は Cowley への批判であった。Cowley は18世紀には Donne 以上に知られていたが、その詩の無理なコンシートへ Johnson は批判を向けているのである。Johnson の批判は Donne より Cowley へ向けられている。Johnson は、Cowley のコンシートは詩人の知性を誇示するだけで終わっていると考えている。詩の目的はいかにして道徳的な意識を読者に喚起するかであるという Johnson の文学観からすればやはり wit は容認できない。Johnson が Cowley の詩を批判し、その詩に道徳的な意義を見い出していないことは形而上詩全体への批判というより Cowley の詩への批判であると言えよう。Johnson は『Cowley 伝』で Donne の詩についても言及しているが、その批判はもっぱら Cowley に向けられている。Johnson は既に述べたが『英語辞書』に400回近く Donne の詩から引用していることから明らかなように、Donne の詩を徹底的に否定はしていない。Donne の詩、特に『唄とソネット』には必ずしも道徳的な意味がある詩は多くはないが、その他の Anniversary poems には道徳性を感じさせるところは少なからずある。Donne 以後の形而上詩人はややもすればただコンシートに走り、彼らはそのできばえに悦に入っている感が強い。読者が詩を理解できるかどうかよりも読者をあっと言わせるコンシートを探し、自己満足に浸る。そこを Johnson は見抜き、形而上詩を批判したが、Donne の詩はコンシートが詩全体とうまく調和している Johnson は考えていたように思われる。ということはコンシートにより Donne の詩の感情と思想がうまくバランスがとれていたことを Johnson は暗示している。Johnson は感情と思想の統一という表現はしなかったが、本来ならば Donne の詩にその表現をすべきであった。ところが Cowley の詩に無理なコンシートを見出し、それを形而上詩全体の特徴と見なしてしまったところに Johnson の『Cowley 伝』の失敗があった。形而上詩人はすべて Cowley のような詩人だけではない。本家本元の Donne の詩には形

而上詩詩人にふさわしい詩が少なからずあることは確かである。それを Johnson は知っていた。だから Donne の詩を全面的に否定する姿勢は見せなかった。しかし Johnson はやはり Donne を批判する。それはコンシートが自然からかけ離れているということである。自然から遊離すればするほどコンシートはその威力を発揮するわけだが、逆にそれは Johnson にとっては批判の対象になる。Johnson のいう自然はまた理性あるいは常識へと至るが、理性、常識が文学を構成する18世紀にあってやはりコンシートは評価できなくなってくる。20世紀に入れば Eliot が Donne の詩に「感情と思想の統一」をみたが、Johnson がコンシートへの味方を変えれば Donne そして形而上詩全体への彼の評価も変わったはずであるが、Johnson の文学観からしてコンシートは否定せざるをえなかった。思想を感情に変えるコンシートの意義を Johnson は認めなかったし、またそのようなコンシートの意義は思いつかなかったのかもしれない。Johnson にとってコンシートは *discordia concors* で「不調和」を強調しすぎ、「調和」を軽視するはめとなった。コンシートにより詩人が「感情を動かしたり」「精神を教育」することよりも「知性にショックを与える」を詩の目的とすれば、それは「詩人の名前の権利」失うことになる。Johnson の形而上詩批判はこのほかにも学識が詩にきちんと消化されていないこと、形而上詩人の詩の書き方、すなわち特殊にこだわり、一般的なものを書き尽くせないことなどが挙げられる。

Johnson の形而上詩批判は Ben Jonson, Dryden, Pope の流れを引き継ぐ批判である。形而上詩批判はそれまでの英詩の常套を無視した wit, コンシート使用により英詩を一変させた。その批判を認めるか否かが形而上詩評価を決定づける。Johnson 以前は wit を認めない姿勢を取っていた。しかし形而上詩賞賛派は witこそが形而上詩の核心を構成するもので、wit 故に形而上詩を容認した。新しい流れが登場すればかならずやそれに対して賛否両論が生じるのはいつの時代でも同様である。形而上詩という一風変わった詩風が英詩を圧巻したとき伝統主義者は鉄槌を振り落とされた観がした。伝統的な英詩を守るために Ben Jonson, Dryden, Pope, Johnson はやっきになった。それもすべて形而上詩の最大の武器である wit を認めないという姿勢を取った。詩人 Donne の詩を詩として評価することはなかった。Johnson の影響で形而上詩はその存在感を失っていく。ところが19世紀に入りロマン派詩人から Donne 評価が強まってくる。彼らはいかしにて Donne 再評価への道を歩むことになるのか。この問題は以後論ずることにする。

注

本論文の一部は2015年7月18日に行われた「第6回東北ロマン主義文学・文化研究会」（東北大学文学部文学研究科）のシンポジウム「ロマン派詩人における形而上詩人の継承と再評価」での発表に基づいている。

- (1) *Ben Jonson*, ed., Herford and Simpson (Oxford: Clarendon Press, 1947), Vol. VIII, p. 621.
- (2) *Ibid.*, p. 624.
- (3) *Ibid.*, p. 622.
- (4) *Ibid.*, p. 620.
- (5) *Ben Jonson's Conversations with William Drummond of Hawthornden* ed. R. F. Patterson (London: Blackie and Son Limited, 1923), p. 5.
- (6) *Ibid.*, p. 12.
- (7) *Ibid.*, p. 5.
- (8) *Ibid.*, 18.
- (9) *Ibid.*, p. 11,
- (10) *Op.cit.*
- (11) *The Metaphysical Poets* introd. and ed. Helen Gardner rev. ed. (Harmondsworth: Penguin Books Inc., 1968), pp. 143-4.
- (12) *Ibid.* p. 144.
- (13) *Op. cit.*
- (14) *Ibid.*, p. 225.
- (15) Robert Lathrop Sharp, *From Donne to Dryden: The Revolt Against Metaphysical Poetry* (New York: Octagon Books, 1977), p. 183.
- (16) *Essays of John Dryden* ed. W. P. Ker (Oxford: Clarendon Press, 1926), I. p. 52.
- (17) *Ibid.*, II. P.19.
- (18) From "An Account of the Ensuing Poem in a Letter to the Honourable Sir Robert Howard," prefaced to *Annus Mirabilis*.
- (19) *Op. cit.*
- (20) Sharp, p. 193.
- (21) *Ibid.*, p. 211.
- (22) *Ibid.*, pp. 211-212.
- (23) Ian Jack, "Pope and 'the Weighty Bullion of Dr. Donne's Satires'," *PMLA*, 66(1951), p. 1012. L. 19 は筆者追加による。
- (24) A. J. Smith ed., *John Donne: The Critical Heritage* (London and Boston: Toutledge & Kegan Paul, 1975), p. 234.
- (25) *Ibid.*, p. 178.
- (26) Rev. Whitwell Elwin intro. and notes, *The Works of Alexander Pope*, New edition (New York: Gordian Press, 1967), VI. p. 51.
- (27) Raoul Granqvist, *The Reputation of John Donne 1779-1873* (Stockholm: Almqvist & Wiksell International, 1975), p. 33.
- (28) Samuel Johnson, *Lives of the English Poets* (London: Oxford University Press, 1964 [rptd]), Vol. I, "Cowley," p. 13.

- (29) Ibid., p. 14.
- (30) Ibid., p. 28.
- (31) Ibid., p. 13.
- (32) Op. cit.
- (33) Ibid., pp. 15-19.
- (34) Ibid., pp. 430 431 in “Addison.”

Bibliography

- N. J. C. Andreasen, *John Donne: Conservative Revolutionary* (Princeton: Princeton University Press, 1967)
- Joan Bennett, *Five Metaphysical Poets* (Cambridge: Cambridge University Press, 1966)
- Robert Armi Bryan, *The Reputation of John Donne in England from 1600 to 1832: A Study in the History of Literary Criticism* (University of Kentucky, Ph.D. dissertation, 1956)
- Douglas Bush, *English Literature in the Earlier Seventeenth Century 1600-1660* (Oxford: Oxford University Press, 1973)
- John Carey, *John Donne: Life, Mind and Art* (London: Faber and Faber and New York: Oxford University Press, 1990)
- Hugh Sykes Davies, *The Poets and Their Critics* (Harmondsworth: Penguin Books, 1943)
- Joseph E. Duncan, *The Revival of Metaphysical Poetry* (Minneapolis: University of Minneapolis Press, 1959)
- Peter A. Fiore ed. *Just So Much Honor* (University Park and London: The Pennsylvania State University Press, 1972)
- Helen Gardner, *The Metaphysical Poets* (Harmondsworth: Penguin Books, 1968)
- Helen Gardner, *John Donne: A Collection of Critical Essays* (Englewood Cliffs, N. J. Prentice-Hall, Inc., 1962)
- Raoul Granqvist, *The Reputation of John Donne 1779-1873* (Stockholm: Almqvist & Wiksell International, 1975)
- Achsah Guibbory, *John Donne* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006)
- D. L. Guss, *John Donne, Petrarchist: Italianate Conceits and Love Theory in the Songs and Sonets* (Detroit: Wayne State University, 1966)
- Dayton Haskin, *John Donne in the Nineteenth Century* (Oxford: Oxford University Press, 2007)
- Clay Hunt, *Donne's Poetry: Essays in Literary Analysis* (New Haven: Yale University Press, 1954, [rptd.] 1969.
- Jim Hunter, *The Metaphysical Poets* (London: Evans, 1975)
- J. B. Leishman, *The Monarch of Wit* (London: Hutchinson University Press, 1969)
- C. S. Lewis, *English Literature in the Sixteenth Century* (Oxford: Oxford University Press, 1973)
- John Redpath ed., *The Songs and Sonets of John Donne* (London: Methuen and Co. Ltd., 1967)
- Murray Roston, *The Soul of Wit: A Study of John Donne* (Oxford: Oxford University Press, 1974)

- A. J. Smith ed. *John Donne: The Critical Heritage* (London and Boston: Routledge & Kegan Paul, 1975)
- A. J. Smith ed. *John Donne: Essays in Celebration* (London: Methuen & Co. Ltd., 1972)
- Robert L. Sharp, *From Donne to Dryden: The Revolt Against Metaphysical Poetry* (New York: Octagon Books, 1977)
- Joseph H. Summers, *The Heirs of Donne and Jonson* (London: Chatto & Windus, 1979)
- Geoffrey Walton, *Metaphysical to Augustan* (London: Bowes & Bowes, 1955)
- Helen C. White, *The Metaphysical Poets* (New York · London: Collier Books · Cambridge: Collier-Macmillan Ltd. , 1966)
- George Williamson, *The Donne Tradition* (New York: The Noonday Press, 1958)
- *The Proper Wit of Poetry* (London: Faber and Faber, 1961)
- *Six Metaphysical Poets* (New York: The Noonday Press, 1967)
- A. H. Nethercot, “ The Reputation of the ‘Metaphysical Poets’ during the 17th Century.” *JEGP*, 23 (1924), pp. 173-198.
- “The Reputation of the ‘Metaphysical Poets’ during the Age of Pope.” *PQ*, 4 (1925), pp. 161-179.
- “The Reputation of the ‘Metaphysical Poets’ during the Age of Johnson and the ‘Romantic Revival.’ *SP*, 22 (1925), 81-132.
- 川崎寿彦『ダンの世界』(研究社、1967)
- 原田純『ダン・コンテクスト』(研究社、1991)
- 杉本龍太郎『形而上詩のすがたと流れ』(篠崎書林、1972)
- 村岡勇『英詩のすがた』(研究社、1958)
- 村岡勇『形而上詩の諸問題』(南雲堂、1965)
- H. I. J. グリアスン『形而上詩人論』本田錦一郎訳(北星堂、1969)